

英語教育に於ける音声の基礎的指導（１）

—— 理論と実際 ——

奥 島 光 晴

Some Fundamental Suggestions for Improving Pronunciation of English. (1)

Mitsuharu OKUSHIMA

Summary ;

In the present writer's opinion, the pronunciation of English is always the difficult points for his Japanese students to master in his classes. If, in the case his students are taught how to surmount the difficulties of English pronunciation theoretically and practically in an earlier stages, their ability of speaking or hearing English will be gradually and steadily more improved.

It is essential for non-native speaker of English to know the fundamental knowledge of English pronunciation for having a good command of English.

Here, the present writer has suggested several subjects for his students in relation to English sounds, sound changes and stress, etc. The contents of the present paper are as follows ;

Language formation period, Four phases of language learning, Fundamental ability of communication, Phonetics and phonology, Standard pronunciation, Phonetic symbols and phonetic notation, its use and the ideas, The name of sound symbols, Sound classification (1) voiced sounds and voiceless sounds, Sound classification (2) — Vowel and consonants, semi vowel, Natural speed of speech, The use of schwa, The movements of stress and its meaning.

序

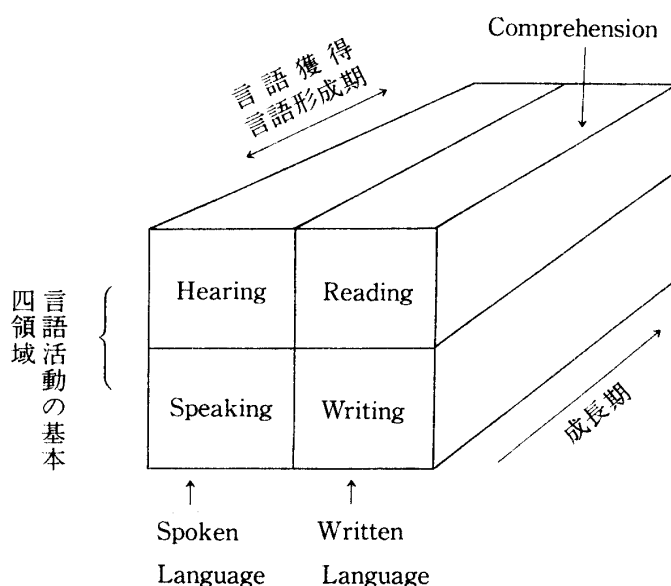
一般に、「言語形成期」(Language Formative Period)は6, 7才から始まり, 13, 14才頃まで続き, その「時期」に言語が獲得固定化されると考えられている。「言語活動の四領域」と言った観点から「言語形成期」を見た場合, 特にその前半は, 音声の習得に費やされ, Speaking,

Hearing, Comprehension と言った, Spoken Language (音声言語) が主として獲得対象となる。これに対し, 言語形成期の後半は, Reading, Writing と言った, Written Language (文字言語) が主となる。

このことは, 母国語 (Mother Tongue) 習得について言えることであるが, 大学生の外国語 (英語) 学習について考えてみれば, 「言語形成期」(日本語) を完了した後に, 英語を学習し始め, しかも, 「言語活動の四領域」全体を同時に学習していることになる。

我が国に於ける英語学習の現状は, 入試などの関係もあり, Hearing や Speaking と言った音声面の学習が立ち遅れ, 「読んで訳す」と言う「訳読中心」(Translation Method) の Written Language による学習が優先している。

筆者がここで述べている, 言語形成期と言語活動の四領域の関係は, 次の様に, 図示することが出来よう。



音声的に見て外国語学習の最も基本的な事柄は, Mim—Mem Practice を徹底して行う事である。即ち, Mimicry—Memorization Practice (模倣と記憶による訓練) は, 外国語学習の入門期の重要な部分であり, 次に挙げる諸要素がこれに伴なう。

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1. Recognition (識別) | 6. Expansion (展開) |
| 2. Understanding (理解) | 7. Concentration (集中・理解) |
| 3. Repetition (反復) | 8. Participation (意識参加) |
| 4. Substitution (代替) | 9. Comprehension (読解) |
| 5. Variation (転換) | 10. Exercises (練習) |

入門期に於ける発音と綴り字の指導は難しい面もあるが, 最近では, “フォニックス”と称して, 発音と綴り字 (Spelling) との関係を, 新しいRule によって教えようとする試みもなされている。(英語教育, 1987. 10月号, pp.26~28, 大修館)

筆者は、英語教育の分野の中で、音声教育を専門とし、音声教育を第一主義と考える者であるが、学者の中には、次の様な発言もある。「音声指導を厳しく行ったり、発音を注意しすぎると、学生が臆病になってしまい、却って効果が上がらない。発音など多少間違えても、意味は前後の文脈から理解されるし、場面があれば意味をとり違えることはない。例えば、食堂で rice (ごはん) を lice (しらみ) と間違えて発音しても意志の伝達に支障はない。音声面に力を入れるよりも、他の分野に指導の重点を置くべきだ。」

しかし、筆者は「音声教育」としては、理論的にも指導方法としても教える以上は正確に指導すべきである、と考える。しかし、実際の運用面では、各個人の能力に応じて多少の“variety” (変種, 多種性) をもって発音されても良いと考える。そして、そうした間違いは、発音に上達する際の過程であって、到達目標は正確な発音の習得に置かなければならないと考える。結局、もし、rice [rais] と lice [lais] の混同を認める事は、英語音声教育の前提を否定することになってしまう。

筆者はかねてより、大学教養課程に在籍する学生に対して、出来る限り早い時期——例えば、大学一年生の前期に、英語音声面の基礎的な知識を、理論的、体系的かつ実践的に指導すべきだと考えてきた。

以下、本稿において、英語音声理論上、必須であると考えられる数項目の事柄について、理論と実際の両面から平明に述べたものである。

これに先立ち、拙稿、「発音から見た、英語らしい英語への実践的考察」、福井工業大学研究紀要、第17号、1987、pp. 345—355に於いて、筆者は既に音声学同分野に於ける拙論を発表したが、本稿はそれを部分的に補うものである。

本稿の内容構成は次の通り。なお、筆者は表現伝達 (Communicative Theory) の面から、音声の重要性についても、考察を試みたいと考えている。

内 容

序

- I. 基礎音声表現力の養成のために
- II. 音声学と音韻論
- III. 教室英語の標準発音について
- IV. 発音記号の必要性和現実性
- V. 発音記号の名称
- VI. 音分類①——有声音と無声音
- VII. 音分類②——母音と子音
- VIII. Natural Speech の表現——弱形の使い方
- IX. アクセントの移動と意味の変化

あとがき

最後に、ここで、小栗敬三教授の「英語音声学概論より、拙論と同じ立場をとる下記の文を引用し、本稿序文を結びたいと思う。

『言葉という従来は書き言葉（文字言語）に重点をおいたが、最近話し言葉（音声言語）を中心に学ぶ正しい学習方法をとるようになった。文法よりもまず発音の勉強が必要である。いかに文法的に完全な文章でも、発音が悪かったら聞く人がわからない。悪文でもよく発音されたら相手が理解できる。また人間の発声器官は練習さえすれば、どんな外国語のどの音（おん）でも発音できる構造に生まれつきできている。私たちは正しい美しい発音を目標に大いに努力しようではないか。』

I 基礎音声表現力の養成のために

一 音声学を必須とする理由

基礎音声表現力の養成のためには、授業中発音に興味を持って学習したり、発音に関する基本的な入門書を揃えてゆく事が大切である。

1. 発音の知識をもつこと

発音についての基本的な知識をもっていること。その様な知識を与えてくれるものは「音声学」である。従って、音声学として必修とされる事項や術語については完全に修得しておくことが大切である。例えば、有声音、無声音、母音、子音、半母音、容認英語発音、一般米語、有声化、無声化、鼻音化、イントネーション、リズムなど。

2 発音記号を常に意識していること

辞書を引いた時に、単語の意味や用法を調べるだけでなく、必ず発音記号を書き、アクセントの位置を確認し、発音してみる習慣をつけることが大切である。

例えば、以下の単語では、品詞によって、発音（アクセントの位置）が異なる。

〈例〉	形容詞、又は名詞	動詞
conduct	[ˈkɒndʌkt]	[kənˈdʌkt]
frequent	[ˈfri:kwənt]	[friːˈkwent]
object	[ˈɒbject]	[ɒbˈject]
present	[ˈpreznt]	[preˈzent]
record	[ˈrekɔ:d]	[reˈkɔ:d]
abstract	[ˈæbstrækt]	[æbsˈtrækt]
concrete	[ˈkɒkri:t]	[kənˈkri:t]
increase	[ˈɪnkri:s]	[ɪnˈkri:s]
permit	[ˈpə:mit]	[pəˈmit]
absent	[ˈæbsent]	[æbˈsent]
instinct	[ˈɪnstɪkt]	[ɪnsˈtɪkt]

更に、次に挙げる単語では、英音と米音でアクセントの置き方が異なることがあるので注意。

〈例〉

advertise, diagnose, caravan, dictionary, testimony, illustrate, frontier, secretary, melancholy, aristocrat, stationary, territory, garage, debris, dormitory, ceremony, promulgate, harass, concrete, その他

以下に挙げる辞書は、我が国で発売されている学生向けのものであるが、内容的にはそれぞれ特色を出している。いずれも入手しやすいものである。

エッセンシャル英和辞典 旺文社 1985, アンカー英和辞典 学習研究社 1985, 新簡約英和辞典 研究社 1968, ユニヴァース英和辞典 小学館 1979, ニューワールド英和辞典 講談社 1974, シニア英和辞典 旺文社 1985, リーダーズ英和辞典 研究社 1984, ライトハウス英和辞典 研究社 1984, カレッジクラウン英和辞典 三省堂 1984, グローバル英和辞典, 三省堂 1976, 現代英和辞典 研究社 1976, 新英和大辞典 研究社 1980。

3 発音記号が活用できること

我が国で発売されている多くの辞書の音声表記は、D. Jones 式発音記号に従っている。これは、教え易く、学習し易く、使い易く、読み易いという理由によるものである。もちろん D. Jones 式発音記号にも不備な点はあるが結局は最も便利なものであるといえる。D. Jones の辞書は、English Pronouncing Dictionary (1917)として有名。D. Jones の死後、A. C. Gimson (London 大学) が全面改訂を行っている。拙稿、前掲論文、pp. 347—348を参照。

なお、発音表記辞典としては、下記の2点が英音と米音とを代表するものであろう。

D. Jones; English Pronouncing Dictionary, 1967

J. S. Kenyon & T. A. Knott; A Pronouncing Dictionary of American English, 1953

4. 強勢、抑揚などの知識をもつこと

声を出して読む習慣をつけることは当然必要なことであるが、その際に、強勢 (stress), 抑揚 (intonation), などについても注意して読むことが肝心である。又、強勢、抑揚などの符号のつけ方についても覚えておくことが大切である。しかしアクセント符号の付け方やその種類、又、イントネーション符号の付け方やその種類は学者によってまちまちである。従って、テキストに準拠して覚えたり、教師の指示に従うのが良い。

1 例として、英会話教本、英語教育協議会、1965p. 62よりアクセントやイントネーションの表記例を引用する。

A: Excuse me, what time is it?
/ʔks ʔkyúwzmiyʔ ʔhwát ʔtáymizitʔ //
B: I beg your pardon.
/ʔáy bégýər ʔpárdnʔ //
A: I think my watch is slow. Do you have the right time?
/ʔáy θɪŋkmáy wáčɪz ʔslówʔ ʔdəyæ hævðə ráyt ʔtáymʔ //
B: Yes, it's just 3 o'clock.
/ʔyészʔ ʔɪts ʔæs θriyə ʔklákʔ //
A: Thank you. I have an appointment at 3:15, and I was afraid I was late.
/θúéŋk yùwʔ ʔáy hævəne páyntmíntət θriy fíf ʔtiynʔ ʔəndáywəzə fréydaywəz ʔléytʔ //
B: I just set my watch by the radio, so I'm sure it's right.
/ʔáy ʔəs sét máy wáč bayðə ʔréydiyòwʔ ʔsəwaym ʔúrits ʔráytʔ //

5. 基本図書を揃えること

音声学や発音の指導に関する図書を揃えておくこと。学習中に不明な個所が見つかったとしても、「どの本のどこを調べれば明らかになるか」だいたい予測のつくようになることが大切である。又、こうした事が能率的な学習を可能とする。例えば、島岡 丘；教室の英語音声学、竹森 滋；英語音声学入門、東後 勝明；英語発音のコツ、藤井 健三；現代英語発音の基礎などは記述も分り易く、有益である。

その他、英米の基本図書としては次のものが挙げられよう。

A. C. Gimson; An Introduction to the Pronunciation of English, 1972

Kenyon; American Pronunciation, 1969

R. H. Gerhard; A Handbook of English and American Sounds, 1972

6. ラジオ、テレビの語学番組等の利用

音声学習の方法としては、ラジオやテレビの語学番組や二ヶ国語放送の英語版を利用するのもよい。二ヶ国語放送の英語版などで読まれている「読みのスピード」はかなり早く読まれており、“natural speed”に慣れるには良い機会であろう。一般的に言えることだが、外国語を習得しようとするれば、語学放送を利用するなどして積極的で意欲的な姿勢が大切である。

なお、参考までに、下記の語学書（カセット）が有益である。

リチャード・グッドマン；新英語発音辞典、小島義郎；英語発音の基礎、小川邦彦；ブラッシュアップ英会話、安田一郎；英語の文型と文法、田崎清忠；会話の基礎と応用。

7. 教育機器の利用

カセットテープレコーダーを活用して、テープのモデルについて声を出してリピートしたり、モデルと同時に発音したり、録音してみても自分の発音を知ることが大切である。そして、教官に自分の録音テープを聞いてもらい、助言を仰ぐことも大切である。その際には、発音が良いとか悪いとか言う漠然とした印象的な感想よりも、なるべく具体的に指示を受けるとよい。例えば、母音や子音の調音は正確であるかどうかとか、同化などの音声変化が、自然であるかどうか、又、リズムやイントネーションの動きが、適切であるかどうかなどである。

例えば、次の Tag-Question では、イントネーションの構造によって、意味が異ってくる。

He went to London last year, didn't he?

He went to London last year, didn't he?

II 音声学と音韻論

1. 音声学の研究対象、方法論

音声には、次の3面がある。

- (1) 音声器管 (organs of speech) によって、調音される過程
- (2) 音波となって空中を伝わる過程

(3) 聴覚器管によって聞きとられる過程

音声学の研究対象は次の通りである。

調音過程を研究対象とするのは調音音声学 (Articulatory Phonetics) である。音声を物理的に研究対象とするのは音響音声学 (Acoustic Phonetics) である。聴覚器管のメカニズムを研究対象とするのは聴覚音声学 (Auditory Phonetics) である。

音声学は、言語一般の音声を研究対象とするか、それとも特定言語の音声を研究対象とするかによって、一般音声学 (General Phonetics) と、英語音声学 (English Phonetics) や日本語音声学 (Japanese Phonetics) のような特定言語音声学に分けられる。音声学の理論を他の分野に応用するものを、応用音声学 (Applied Phonetics) と言う。音声学の理論を英語教育や日本語教育に応用するのは教育音声学である。音声学を言語治療に応用する言語治療士 (Speech Pathologist) と呼ばれる新しい職業も生まれている。音声を理論的に研究するものを、理論音声学

(Theoretical Phonetics) と呼ぶ。二ヶ国語以上の音声を比較検討するものは比較音声学と呼ぶ (Comparative Phonetics)。対照 (対比) 音声学 (Contrastive Phonetics) もある。

音声学の研究方法には、主観的方法 (subjective method) と客観的方法 (objective method) の二種がある。前者は、聴覚的方法 (acoustic method) であり、後者は、実験的方法 (experimental method) である。前者は、音声を自分の聴覚器管と調音器管によって記述、分類して研究するものである。即ち、調音的あるいは聴覚的に、舌の位置、両唇の形状、唇歯の状態などを観察して、発音方法や音の性質を調べたり、音の長さ、高さ、強さ、抑揚などを研究する。後者は、実験機器を用いて音声を研究するものである。音声学が進歩・発展する為には、音声をより客観的に把握し、より精密に分析、記述をしなければならない。現在広く用いられている音声分析装置は、Sound Spectrograph (サウンドスペクトログラフ) である。

Sound Spectrograph では、母音はフォルマント表記され、それぞれ F₁, F₂, F₃, F₄ などと明記される。破裂音や摩擦音なども明瞭に表われる。有声化や無声化などの考察にも有益であるが、鼻音化の考察には適していない。Sound Spectrograph は声紋分析としても有効である。

2. 音韻論の研究

音韻論については、音声学と音韻論の立場を比較して簡単にまとめてみることにする。

- ① 音声学はできる限りの細かな単位まで分析、記述しようとする。これに対し、音韻論は1つ1つの言語ごとに必要最少限の単位を取り出し、それが全体としてどういう体系 (Sound System) をなしているかを究明する。
- ② 音声学は音をできるだけ細かく分類しようとするのに対して、音韻論は各言語ごとに必要最少限の分類をしようとする。
- ③ 音声学では、強勢や音調などは音素としては扱わないが、音韻論では、これらを「かぶせ音素」(Supra Segmental) と呼ぶ。「かぶせ音素」としては、強勢 (Stress)、音調 (Intonation) の他に連接 (Juncture) も含めている。
- ④ 音韻論では無数にある音声を系統的に分類し、意味の区別を表わすのに用いられる音声の最

少単位を設定して音素 (Phoneme) と呼んでいる。

⑤ 音素の設定条件

アメリカ構造言語学では、音素を設定するための原理としては、次のものが挙げられる。

(1) 対立 (Contrast) の有無

同一の音声環境で意味の区別をなす機能を有する二つの音は対立をなし、異なった音素に属する。例えば、pin [pin] と bin [bin] では、[-in] という同じ音声環境で語頭に生じ、語の意味を区別する機能を有するから、両音は対立をなし、別個の音素に属する。

(2) 自由変異 (free variation) の有無

同一の音声環境に表われる音でも、意味の区別を伴わない時はこの2音は自由変異をなすとして同一の音素に属する。例えば、stop [stop] の [p] は強い破裂 (explosion) を伴うこともあれば伴わないこともある。しかし、いずれにしても、同じ音声環境でありながら、意味を区別していない。

(3) 相補的分布の有無

二つの音が同一の音声環境に生ずることはなく、互いに補い合う関係にあるものは、相補的分布をもつと考えられ、同一の音素に属するとみなされる。例えば、keep [ki:p] の [k] と cool [ku:l] の [k] では、前者は前部母音 [i:] の影響で前寄りの [k] であり、後者は後部母音 [u:] の影響で後寄りの [k] である。この二音は決して取り違えられることはなく、同一の音声環境には生じない。この二つの [k] は同一の音素 [k] に属する異音と考えられる。

(4) 音声的に類似しているかどうか。

日本語の「ん」には [m], [n], [ŋ], [ɲ], [N] の5種があり、それぞれ、専門 [sem mon], 専念 [sen-nen], 元気 [genki], 天女 [ten no], 天才 [tensai] の様に用いられる。この特徴としては共通の鼻音としての要素をもっている。従って、同一の音素に抱括し記号 /N/ で表記する。

拙稿；前掲論文中、5、日本語発音と英語、[n] p351参照。

(5) その他、体系の作業原則、環境同化の作業原則、経済の作業原則等については、国語学大辞典 pp. 119—121 に詳細な解説が見られる。

なお、Phoneme 論 (音族) については、小栗敬三著；英語音声学概論、pp. 26—28 を参照。

III 教室英語の標準発音について

英音か米音かの選択

我々が通常「英語の発音」と称しているものには、イギリス英語の発音 (英音) とアメリカ英語の発音 (米音) とがある。英音とか米音とか言った場合、前者は「容認発音」 (Received Pronunciation 略称 R. P.) に代表されるもので、後者は「一般アメリカ英語の発音」 (General American 略称 G. A.) に代表されるものである。その他種々な方言音があるが、教室英語では指

導対象としていない。例えば、米音には3種の方言音があり、それぞれ、東部方言、中西部方言、南部方言と称されている。

英音を選ぶか米音を選ぶかが問題とされることがあるが、英語の発音としては、英音、米音のいずれでもよく、学ぶ機会が多く、しかも自然に発音でき、学生の得意とするものをマスターすればよい。但し、ある音は英音式に発音し、ある音は米音式に発音すると言うように、不統一ではいけない。どちらか一方の音に統一してそれに徹底すれば良いであろう。しかし、理解する際には、英音でも米音でも同じ様に聴解できなければならない。結局、英音でも米音でも平素から聴き慣れていることが大切であり、英音と米音の違いが分っていることが必要である。

音声学習の重点としては、英音と米音の差を意識することも大切であるが、英語音と日本語音の差異一個々の音の差異はもとより、音体系の比較一にポイントを置くことも大切である。

なお、英音と米音の特徴については、既に拙稿において多くの具体例と共に詳述した。拙稿 pp. 353—354を参照のこと。

続く。

主要参考文献は続編(2)で紹介する事と致します。